

自己知識の獲得と維持

中 里 浩 明

主題について、譬え話でもって始めよう。

太郎は、自分のことを、事に臨んで積極果敢な男だと見ている。花子に会って、自分の印象を尋ねると、そうは思っていないので愕然とする。だが、このような反応を、そのまま軽々には受容しない。むしろ、自分がどれだけ強気で、積極性に富むかを示そうとし始め、時には、一層攻撃的にさえ振舞うであろう。こうして、太郎が花子に、自分が実際は積極的だと確信させることができれば、今後は、花子が、その新たな印象に基づいて対応してくれる、つまりは、太郎本人の自己についての考えに合致するような扱いを、相手から期待することができ、心安んずることが可能になる。また、花子の友達の輪に、その印象を伝達して貰うとともに、直接的な働きかけと相俟って、徐々に、積極果敢な男というイメージが固定化し、ついには、周りの皆に、太郎は、そのように眺められるに至るであろう。

自己立証化過程

上述の譬えは、あくまで素描であって、必ずしも、正確を期したものではない。しかし、この論文で扱おうとしている問題を、何程か衝いている筈である。すなわち、自己概念 (self-conception) と、通常、称される事柄に関係するわけであるが、それを、最近の認知社会心理学の特徴的な趨勢のなかで、つまりは、自己についての認知的構成 (Hampson, 1982) を、殊更、強調する観点から、捉えていこうとするのである。その際、William B. Swann Jr. (in press; Swann & Hill, 1982; Swann & Read, 1981a; Swann & Read, 1981b; Swann, Stephenson & Pittman, 1981) の、「自己立証化過程」(self-verification processes) という見解が、ひとつの重要な足掛かりを提供してくれる。引き続く記述は、主として、この立場についての概説と、我々のごく卑小な調査研究から構成されている。

自己確証的フィードバックの選好

Swann & Read (1981 a) によれば、個々人は、他の人々から、自己確証的なフィードバック (self-confirmatory feedback) を頻りに求め、それによって、自己概念の安定化を企図しているのである。この点が、関連する3つの研究で証拠立てられている。

まず、研究1では、自己概念として、assertiveness と emotionality に着目され、人々は、相互作用の期間中、相手から、各々の、自己についての概念を確認する (confirm)、もしくは、確認しない (disconfirm)、いずれのフィードバックをより多く求めるか、が検討された。結果は、双方の属性とも、自己概念を確認するフィードバックが、より選好されたことは明瞭であった。従って、人々は、自己概念を確認するような社会的フィードバックを獲得すべく動機

づけられているのであろう。

この最も一般的な仮説の検証に続く、研究2では、*assertiveness* に関して、人々が、自己確証的な社会的フィードバックを、より多くの金銭を支払ってまで獲得しようと試みるかが扱われ、予測が支持された。かなりのコストを覚悟してまで、その種の反応を、人々は他者から収集しようとするようである。

更に、研究3では、*emotionality* に関して、自己確証的フィードバックを人々が選好して求めるという、この傾向の動機づけ要因が検討され、それが、特に、情報価値が高い (*informative*) と看做されている故だということが見出された。すなわち、人々は、自己についての諸概念を確証してくれる社会的フィードバックに対して、より大きな価値を付するようである。

概括すれば、社会的相互作用の過程において、人々は、自己についての諸概念を立証し、確証するようなフィードバックを、他者から求めようとする傾向を持つ。というのは、その種の社会的フィードバックが、当人にとって情報価値があり、標徴的 (*diagnostic*) で、かつ、注意を惹きつけてやまない (*compelling*) からなのである。

この、自己確証的フィードバックを、自己非確証的フィードバックと較べて、より選好するという傾向は、かなり一般的なようである。すなわち、自己についての諸概念が拡散していて、統合が不全という、限られた個々人間では、あるいは、この傾向は余り見られないかも知れないが、自身の行動や他者の反応の観察に基づいて、相当の明確な自己概念を有している、大部分の、ごく普通の人々のあいだでは、自己のイメージを立証し維持しようとの動きが認められるのである。

別言すれば、個々人は、自己概念の安定化を自ら進んで図るということであり、その意味で、単に受身の存在ではなく、能動的な行為主体 (*active agents*) の役割を演ずる。そして、たとえば、「積極果敢な」という属性を、自己概念として、しっかりと内在化する一方で、他方、これを含む自己についての諸概念を、周囲の相互作用パートナー達の信念体系のなかに植えつけ、外在化しようともくろむであろう。個々人を取り巻く社会的 (対人的) 環境の安定化が、この際、不可欠だからである。従って、こういう観点からすれば、自己概念は、個人内 (*intra-personal*) の現象であるとともに、個人間 (*inter-personal*) の現象でもある、ということになる。

自己立証化の戦略

Swann & Read (1981 b) によれば、社会的相互作用の展開とともに、自己概念を立証しようとして人々が用いる戦略は多様に变化する。

相互作用の開始時には、情報を探求する (*seek*) 戦略が駆使される。当該研究においては、*likability* という属性が一貫して扱われているが、まず、研究1では、他者の評価 (*appraisal*, 仮説として提示される) が、自己概念と斉合している、つまりは、確証すると期待される場合に、人々は、他者に対して、より多くの注意を向け、その言明 (*statements*, 正負いずれであれ) を、より長い時間をかけて吟味する、という結果が見出された。しかも、この傾向は、*self-likables* と *self-dislikables* 双方に共通していたのである。

研究2では、相互作用の盛時に使用される自己立証化戦略が扱われている。すなわち、人々は、適切な言動を取ることによって、自己概念を確証するような反応を、相手から引き出そう (elicit) と企てる。たとえば、self-likables は、相互作用パートナーから、正の反応を喚起しようと図る。しかも、この努力が強化される場合がある。それは、相手の評価が自己概念と矛盾するのではないかと疑念を抱くときであり、この折りには、個々人の、社会的世界に対する理解や制御や予測が可能だという信念が脅やかされるので、一層、非常に標徴的な情報、つまり、自己確証的フィードバックを相手から獲得しようと努められる、というわけである (Swann, et al., 1981 参照)。こうして、当初は、相互作用の相手が、個々人の自己概念と一貫する方向で眺めていなくても、徐々に、その評価判断を合致させるべく誘導していくのである。

発見結果を見ると、知り合いになるための会話ののちの、女性パートナーによる男性 selves の印象では、パートナーの評価 (仮説として提示される) が非好意的 (unfavorable) な場合、self-likables は、正の反応をより多く引き出そうとし、逆に、self-dislikables は、好意的な (favorable) 評価をパートナーが抱いていると思った場合に、負の反応をより多く獲得しようと行動していた。それ故、一般に、個々人は、自己確証的なフィードバックを引き出そうとするが、特に、そうするのは、パートナーの評価が、彼等の自己概念と矛盾すると信じるに足る理由を持つ場合なのである。

また、会話の記録を複数のジャッジが判定したところによれば、男性スピーカーは、女性パートナーから、自己概念を確証するような反応を引き出そうとして、相手に、お世辞や賞賛を与えるという戦術を行使していたが、この傾向は、self-likables において特に盛んであり、しかも自己概念と食い違う評価・仮説を相手が抱いていると思った場合に、より頻繁に実行されていた。

更に、相互作用パートナーによる気持の良さ (agreeableness) 判断の推測に関して、self-likables は、相手に対して、より好ましい印象を与え得たと信じ、逆に、self-dislikables は、愛想の悪い人物だと見られたと確信していた。しかも、この傾向は、自己概念と仮説が一致している場合に (self-likables における favorable な仮説、self-dislikables における unfavorable な仮説が提示されたとき)、とりわけ顕著であった。この推測は、しかしながら、パートナーの、当該 selves に対する現実の印象とは合致していないのである。以上の結果から、自己概念と仮説 (パートナーの評価) が、受け取られたフィードバックを、個々人が処理する仕方を水路づける (channel) 働きをしたのであろう、と考量される。

研究3では、社会的相互作用の終了後が扱われている。事後、人々は、自己概念を確証する相互作用の局面を、専ら、想起 (recall) しようと企図する。自己確証的フィードバックを選択して符号化 (encode) し、検索 (retrieve) しようとの努力の故に、このことが生じるのであろう。先の、研究2で見たように、この自己概念と並んで、他者の評価についての仮説も、社会的フィードバックの符号化や検索を導くと考えられる。また、研究1での、自己についての諸概念を確証すると期待されるフィードバックに、人々は、より注目・精査し、重要性を与

えるという点を考慮すれば、その事情から、これらは、熱心に符号化されるフィードバックと言え、後に、より多く想起されるであろう、と推察するに難くはない。

結果によれば、self-likables は、他者の言明のうち、自己概念と食い違う負の言明よりも、これと一致する正の言明を、より多く想起していたし、self-dislikables は、逆の、同様の傾向を示していた。また、他者の抱く評価についての仮説に関して、傾向が特に顕著なのは、好意的評価条件においてだったのであるが、その場合、他者からの、負よりも正の言明が、より頻繁に想起されていた。更に、自己概念と他者の評価についての仮説が一貫しているときのほうが、殊に、self-dislikables においてなのであるが、相手からの正負のフィードバックが、より盛んに想起されていた。

要するに、人々は、自己概念と並んで、相互作用パートナーの評価に関する仮説を確認する社会的フィードバックを選好して想起したし、自己概念と仮説が一貫している、つまり、他者から受け取るフィードバックが自己概念を確認するであろうと、前もって予期していた場合に、特に、そう言い得たのである。

かくして、人々は、時期ごとに、探求・引き出し・想起という3つの戦略を採用しており、社会的相互作用を、自己概念を確認するフィードバックを獲得し収集するための機会としても利用しているのである。

自己矛盾的フィードバックの処理

Swann & Hill (1982) によれば、人々が、自己概念と矛盾するようなフィードバック (self-discrepant feedback) を、他者から受け取り、しかも、当の相手と相互作用する機会のあるとき、つまりは、通常の日常生活と同じ場合ということになるが、そのフィードバックを懸命に反駁する行動をとることによって、脅やかされた自己概念を、工夫して立証しようと試みるであろう。従って、社会的フィードバックの前と後に、自己評定 (self-rating) をしたとしても、変化は殆ど示されないであろう。

他方、何らかの事情で、たとえば、典型的な実験室場面などでは、人々は、自己矛盾的フィードバックを退けるに足る顕出的な (salient) 証拠を生み出すには、不利な立場にあり、そのために、他者からのフィードバックに、自己評定を揃えざるを得ないことになる。従って、この場合には、社会的フィードバック受理の前後では、自己評定を取ってみると、その間に相当大きな変化が認められる筈である。

この点に関しては、既に、Swann & Read (1981 b) の研究において、ある程度、検討が加えられていたが、改めて、集中的に扱おうというわけである。そこで、予め、self-dominants と self-submissives を特定し、この自己に関する概念と一致する、もしくは、矛盾する他者のフィードバック反応を提示することによって、人々がどのように対応するか、また、特に、引き続く相互作用機会の有無と関連づけて、人々が、自己矛盾的フィードバックに、どのくらい抵抗したか、ならびに、どのくらい支配的に振舞ったかについて、複数のジャッジが下した判断、更には、実際の相互作用の後の自己評定の変化、が検討されたのである。

結果は、予測を裏付けるものばかりであった。すなわち、自己概念と矛盾したフィードバッ

クを受け取った者は、一貫したフィードバックを受容した者よりも、self-dominants と self-submissives の区別なく、遙かに抵抗を企てていた。また、矛盾したフィードバック条件下では、self-dominants は、self-submissives よりも、事実、かなり支配的に振舞っていた。更に、自己評定の変化・移行では、後に相互作用の機会が持たれている場合には、フィードバックの一貫性と矛盾性のあいだに、差異は余り見られなかったのであるが（一方は、フィードバックを受容し、他方は、努めて無効化を図り侵蝕したのであろう）、しかし、相互作用の機会が剝奪されている場合には、当然拒絶も反駁も許されず、ために、自己概念と矛盾したフィードバックは、そのフィードバックの方向に、self-dominants と self-submissives 共に、相当大きな自己評定の変化を生み出していたのである。

このように、引き続き相互作用の機会は、自己一貫的に行動する自身の観察を通しての自己概念の再確認、ならびに、その、他者への提示を促すが故に、自己についての諸概念の妥当性に関する人々の確信を回復させ、かつ、矛盾したフィードバックの効果を無にするに充分なききめがあった。他に、過去の事例の想起が挙げられるけれども、現実の行動と較べれば、効力はやはり弱いであろう。

さて、ここまで、Swann, W.B., Jr. の、「自己立証化過程」の主張と研究結果を通覧してきたのであるが、筆を転じて、これらを参考にして我々が実施した、甚だ拙い調査研究を報告することにしよう。

調査研究¹

目的

自己概念と一貫した社会的フィードバックを、そうでない矛盾したフィードバックよりも、人々は、より選好して獲得しようとするか、しかも、それを、情報価値が高いと判断するか、という一般的な仮説を、手始めに検討することにした。

方法

刺激材料の構成 自己概念として、「自己主張の強い」self-assertiveness と、「感情表現の豊かな」emotion-expressiveness という、2つの属性を採用した。この選択は、Swann & Read (1981 a) に倣っており、できうれば比較をなしたいと考えたからでもある。

自己主張の強さ、ならびに、感情表現の豊かさに関して、我々は、絞りに絞って、各々8項目ずつを独自に考案し、これらをもとに質問紙を作成した。自己主張の強さに属する項目例としては、「赤点を取って、追試を命じられたら、教授のところへ行行って、成績を再確認しようとする」とか、「ホテルに泊って、サービスが悪く不便な思いをしたら、帰りにフロントで、ひとこと言う」、が挙げられる。また、感情表現の豊かさ属する項目例としては、「うれしいことがあると、思わず、歌をうたって、スキップして歩きたくなる」とか、逆転項目だが、「プレゼントされたり、やさしくしてもらって、“うれしい”という気持ちを相手に伝えるのが苦手だ」、が挙げられる。

次に、各々の項目が、どのくらい、自己主張の強いものか、あるいは、感情表現の豊かなものか、ならびに、社会的に望ましいものかをチェックするために、13名の女性ジャッジに、リッカート・タイプの7段階尺度（-3～+3、しかし、分析では数値を1～7に変換）で、判定をして貰った。

属性の表現度に関して、自己主張の強い方向の4項目（ $M=5.63$, $SD=0.35$ ）と、自己主張の弱い方向の4項目（ $M=3.31$, $SD=0.32$ ）間には、有意な差異が見られた（ $t=8.59$, $p<.001$ ）。また、感情表現の豊かな方向の4項目（ $M=5.48$, $SD=0.60$ ）と、感情表現の乏しい方向の4項目（ $M=2.40$, $SD=0.34$ ）間にも、明瞭な差異が認められた（ $t=7.70$, $p<.001$ ）。

これに対して、社会的望ましきの程度に関しては、自己主張の強い方向の4項目（ $M=5.27$, $SD=0.83$ ）と、自己主張の弱い方向の4項目（ $M=4.02$, $SD=0.65$ ）とのあいだには、やや差異が見られた（ $t=2.05$, $p<.10$ ）。これは、余り良い傾向ではない。また、感情表現の豊かな方向の4項目（ $M=4.08$, $SD=1.08$ ）と、感情表現の乏しい方向の4項目（ $M=3.17$, $SD=0.17$ ）間には、明瞭な差異は認められなかった（ $t=0.56$, ns ）。従って、構成した質問紙の文章（刺激材料）は、一応の基準を満たしていると思われる。

手続 「自己概念質問紙」（A. 自己主張の強いと感情表現の豊かなという鍵となる属性を含む12項目、B. セルフ・モニタリング尺度——主として、時間間隔を設けるために用意したもので、分析には用いない）と、「対人判断質問紙」（C. 先程チェックした刺激材料の文章、D. 個々の文章の持つ情報価値についての評定尺度）、から成る小冊子を被験者に配布した。

まず、自己概念質問紙の各々の項目が、どの程度、自分に該当するかを、リッカート・タイプの7段階尺度（-3～+3、しかし、分析では数値を1～7に変換）で、被験者に記入して貰った。この時点で、女性実験者が、次の対人判断質問紙に関する教示をおこなった。小冊子に載せてある文章を、より具体的に説明する形においてであった。

今、仮りに、あなたに回答して頂いた自己概念質問紙を、未知の女性に見せ、読んで貰ったとします。そして、次の頁にある8つの質問に答えて貰ったと想像して下さい。さて、そこで、あなたが彼女の反応を見ることができるとすれば、どの質問に対する反応を読みたいと思いますか、5つを選んで下さい。

対人判断質問紙の刺激材料の文章は、先の自己概念質問紙と内容が同一で、肯定文を疑問文に変更したものであった。たとえば、「この人は、家の前にトラックが止まっていて、玄関先が通りにくければ、運転手を見つけて、車を移動させて貰う人だと思ったのは、どうしてですか」とか、「この人は、心が張り裂けるほど悲しくても、表情に出せない人だと思ったのは、どうしてですか」、というものであった。

こうして、被験者に、属性ごとに、8つの質問文に対する他者の反応のうちで、読んでみたいであろう5項目を選択して貰った。そのあとで、個々人にとっての、各々の項目の情報価値を、「全く読む価値がない」から「非常に読む価値がある」まで、6段階（0～5）で評定して貰った。提示順序としては、自己主張の強さ判断のあとに、感情表現の豊かさに関する判断が、一貫して続いていた。

被験者 この調査研究に参加して貰った人々のうち、誤解をしていたり、質問紙への回答が不完全であった2名を除いて、残りの18名の女子大生を分析の対象とした。自己概念質問紙の、自己主張の強いと感情表現の豊かな、の自己評定に基づいて、メディアン分割した。そして、自己主張の強い群 (self-assertives, $n=9$, $M=5.56$, $SD=0.73$) と、自己主張の弱い群 (self-unassertives, $n=9$, $M=3.11$, $SD=0.93$)、ならびに、感情表現の豊かな群 (emotion-expressives, $n=9$, $M=5.56$, $SD=0.73$) と、感情表現の乏しい群 (emotion-unexpressives, $n=9$, $M=2.78$, $SD=0.97$)、を作成した。いずれの属性に関しても、両群間には有意な差異が認められた ($t=5.83$, $p<.001$; $t=6.47$, $p=.001$)。

結果と考察

自己概念とフィードバックの選択 自己主張の強さという属性に関して、自己概念と選択されたフィードバックのタイプ間には、有意差は認められなかった [$F(1, 16)=0.94$, ns]²。すなわち、平均値を見ると、自己主張の強いという自己概念を持つ群で、選択されたフィードバックのタイプは、各々、一貫的フィードバックの $M=2.67$ ($SD=0.50$) と、矛盾的フィードバックの $M=2.33$ ($SD=0.50$) であり、これに対して、自己主張の弱いという概念を持つ群では、一貫的フィードバックの $M=2.78$ ($SD=1.20$) と、矛盾的フィードバックの $M=2.22$ ($SD=1.20$)、のごとくであった。

また、感情表現の豊かさという属性に関しては、自己概念と選択されたフィードバックのタイプ間には、有意差が認められた [$F(1, 16)=7.38$, $p<.05$]。詳しく平均値を見ると、感情表現の豊かなという属性を自己概念に組み入れている群で、選択されたフィードバックのタイプは、一貫的フィードバックの $M=2.89$ ($SD=0.93$) と、矛盾的フィードバックの $M=2.11$ ($SD=0.93$) であり、これに対して、その属性を余り有せず自己概念に組み入れていない群では、一貫的フィードバックの $M=3.11$ ($SD=0.60$) と、矛盾的フィードバックの $M=1.89$ ($SD=0.60$)、のごとくであった。両群とも、一貫的フィードバックを、より選好していたのである。

自己概念とフィードバックの情報価値 フィードバックの情報価値の判断に関して、自己主張の強いという自己概念を持つ群と、自己主張の弱いという自己概念を持つ群とでは、その間に、有意差は認められなかった [$F(1, 16)=0.77$, ns ; 交互作用もなし]³。平均値を示せば、自己主張の強い群で、各々のフィードバックのタイプに対する情報価値の判断値は、一貫的フィードバックの $M=4.31$ ($SD=0.68$) と、矛盾的フィードバックの $M=3.75$ ($SD=1.12$) であり、これに対して、自己主張の弱い群での判断値は、一貫的フィードバックの $M=3.97$ ($SD=0.91$) と、矛盾的フィードバックの $M=3.57$ ($SD=1.19$)、のごとくであった。

また、感情表現の豊かさという自己概念を持つ群と、感情表現の乏しいという自己概念を持つ群とでは、フィードバックの情報価値の判断に、かなり信頼できる交互作用が認められた [$F(1, 16)=12.89$, $p<.01$]。単純主効果を調べてみると、前者の、感情表現の豊かな群は、一貫的なフィードバックを、より情報価値が高いと看做しており [$F(1, 16)=5.75$, $p<.05$]、逆に、後者の、感情表現の乏しい群は、やはり、感情表現の乏しいというフィードバックを、

これまた一貫的なものであるけれども、より情報価値が高いと判断していた [$F(1, 16)=7.14$, $p<.05$]。

分化した結果の解釈 人々は、自己概念と一貫した社会的フィードバックを、矛盾したフィードバックよりも、情報価値が高いと看做して、選好して獲得しようとするという仮説は、自己主張の強さという属性では確認されず、他方、感情表現の豊かさという属性では支持された。この分化した結果は、いかに解釈すべきであろうか。

原因には種々のものが想像されるが、不確かでしかない。最たる原因としては、被験者数の少なさが指摘できる。結果を大きく左右しかねないわけで、感情表現の豊かさでは仮説が支持され、自己主張の強さで駄目だった点を考慮すれば、控え目な女性達ばかりであったのかも知れない。また、刺激材料として構成した文章の適切性、社会的望ましさに関するチェックのやや不十分さ、などの質問紙の不備が挙げられる。これと並んで、自己主張という概念の捉え方の個人差や文化差も関係しよう。あるいは、提示順序効果、分析には用いなかったセルフ・モニタリング尺度への反応、これらがバイアスになったのかも判らない。更には、参考とした Swann & Read (1981 a) との、研究方法の相違が考えられる。隣室に居る、未知の、異性の人物に、被験者の記入した質問紙を提示しにいくと見せかけている事態と、我々の、想像して貰う事態との違い、個別実施と集団実施との違い、などである。しかしながら、結局のところ、原因は特定しきれず、調査研究の数を増やすしかないわけで、それ故、ここでは、仮説は支持されそうだと、慎重な表現を取っておくに留めたい。

一般的考察と結論

James (1890) 以来、人々の持つ自己についての諸概念は安定しており、変化はむしろ例外に属し、持続が原則であると思索されてきたようである。また、経験的研究の概観においても(たとえば, Block, 1981; Shrauger & Schoeneman, 1981; Wylie, 1979), 自己概念を変化させることの至難さや、自己評定の長期間安定性、が指摘されてきている。Block (1981) は、広くパーソナリティに関してであるが、Q分類法を軸に、多様な手法を用いて、調査対象者を長きにわたって継続して追跡する、いわゆる縦断的研究を実施し、そのデータを分析して、青年期(13・4歳)から30歳中頃までの、パーソナリティ特徴の安定性・連続性について論述している。

この、いわば、自己概念安定説に対して、自己概念可塑説と呼ぶべき見解がある。たとえば、Gergen (1977) は、彼自身やその他いくつかの実験室実験の証拠を引き合いに出しながら、自己概念は極めて順応性に富むものである、と主張している。すなわち、人々は、自身の行動や他者の反応を観察し、これらの情報を適切な自己概念に翻訳することによって、自己についての推論を積み重ねていく。その意味で、自己概念は、社会的環境の微細な動きに応じて変化するわけである。「社会的コミュニケーションが自己概念を変化しうる仕方の実例は……枚挙にいとまがない」(Gergen, 1977, p. 147), と言う。

ところで、先程も触れたごとく、同じく経験的・実証的研究といえども、現場研究においては、自己概念は遥かに頑強に抵抗している。日常場面での人々の理解も、この線に並んでいるようだ。この相違は、何に由来するのか。いろいろな原因が考慮されようが、Swann (in press) は、人々が受け取る社会的フィードバック制御の程度の差異を、それは幾分か反映している、と推察している。つまり、現場研究や自然場裡では、自己矛盾的フィードバックを他者から受け取ったとき、人々は、その場面を直ちに離れても、後に、自己概念を積極的に再確認する機会があるのに較べて、実験室では、そういう選択権は、普通、与えられていない。この点が、自己概念変化の促進と阻害を、ある程度、規定しているのかも知れない。こうして、実験室実験での自己評定の変化は、一時的なもので、これは、セルフ・イメージの移行と呼ぶべきで、自己概念の変化とは区別すべきだ、との提案がなされている。

さしずめ、Swann の自己立証化過程に関する一連の研究が、意味を濃厚に帯びてくるのは、こういう段階においてである。最近の、自己 (self) やパーソナリティについての認知社会心理学の潮流 (たとえば、Cantor & Kihlstrom, 1981; Markus & Sentis, 1982; Wicklund, 1975) のなかに身を置き、また、いわゆる、パーソナリティ心理学の交互作用説 (たとえば、Magnusson & Endler, 1977 参照) と関連を保ちながら、更には、他者についての仮説の検証に関する先駆的研究 (Snyder & Gangestad, 1981) と緊密な連繋のもとに、彼の研究は、かなり独自の思考の展開を見せている。

繰り返しになるが、Swann (in press) の言説をたどれば、個々人の自己概念というのは、それを通して、周囲の外界を理解し、予測し、制御する手段であり、その意味で、重要な役割を演じている。自己矛盾的なフィードバックを受け取ると、自己概念が脅やかされることになり、外界制御感が危うくされる。そのために、個々人は、自己概念を確証すべく積極的に努力するわけで、非常に標徴的な情報である自己確証的フィードバックを獲得しようと画策するのである。従って、社会的相互作用の最中、相手の判断や評価を、自らの自己概念に合致させるべく導こうと図るし、また、他者が発する自己確証的フィードバックに、殊更、選択的に注意し、記憶に留め、よって、その量を相対的に過大に評価することであろう。更に、他者から、自己矛盾的フィードバックを寄せられたとしても、個々人は、その衝撃を最小限にすべく変形し、解釈をしているのであろう。

もちろん、この自己立証化戦略が失敗することもありうる。その際には、個々人は、現におこなっている確証化の試みを一層強めることであろうし、また、受け取った他者の反応を歪曲・貶価・無視するとか、相互作用を離脱することであろうし、はたまた、自らの自己概念そのものを変更することだってあろう。最後の場合には、以前の自己と覚悟して決別し、自己についての見解を再体制化しなければならないし、同時に、この新しい自己観を持続させるためには、周囲の人々に、これを妥当なものとして受容して貰うべく働きかけねばならず、社会的 (対人的) 環境における、この移行があって始めて、新しい自己観や自己についての諸概念は、根付き安定するということになるのである。

ところで、今後、考察すべき点としては、個々人が、現実的自己と理想的自己を持つとき、

いずれを確証しようと企てるであろうか、その明細化、自己概念把持の強度差の影響、また、自尊感情 (self-esteem) との関連如何の徹底、更には、継続的相互作用以外の自己概念安定化や変化の規定因と自己立証化戦略との関係、などが挙げられよう。

自己についての認知社会心理学的研究は、現在、隆盛を極めて、多様かつ底深さを示している (概観には、たとえば、Wegner & Vallacher, 1980 参照)。本論文では、自己立証化過程という、その単なる一面を垣間見たにすぎず、種々の角度からの接近を図らなければなるまい。しかも、ここでの主張や見解は、これを社会的認知 (さしあたり、Wegner & Vallacher, 1977 参照) という、より広範な領域のなかに位置づけるとすれば、期待の効果・暗黙裡の性格観・他者仮説の検証・ステレオタイプ・ラベリングなどを含む、予言の自己成就 (self-fulfilling prophecies, Jones, 1977) 研究と、関連させていくことができよう。この辺りの、理論的かつ実証的な解明が、筆者の当面の課題である。稿を改めることにしたい。

註

1. この調査研究のデータは、筆者の指導にかかる、中小路まり子の、神戸女学院大学文学部総合文化学科昭和57年度卒業論文：自己概念、と共有するものである。実施と整理段階における彼女の御助力に、深く謝意を表します。但し、データの処理と解釈は、今回、改めて実行したため、同一でないことをお断りしておきます。
2. ここでは、自己主張の強さの方向を示す質問項目が選択された数を、従属変数として扱い分析した。
3. フィードバックのタイプを、within-subjects factor として分析した (Kirk, 1968)。

引用文献

- Block, J. Some enduring and consequential structures of personality. In A. I. Rubin et al. (Eds.), *Further explorations in personality*. New York: Wiley, 1981.
- Cantor, N., & Kihlstrom, J. F. (Eds.), *Personality, cognition, and social interaction*. Hillsdale, N. J.: Erlbaum, 1981.
- Gergen, K. J. The social construction of self-knowledge. In T. Mischel (Ed.), *The self: Psychological and philosophical issues*. Oxford: Basil Blackwell, 1977.
- Hampson, S. E. *The construction of personality*. London: Routledge & Kegan Paul, 1982.
- James, W. *The principles of psychology*. New York: Holt, 1890.
- Jones, R. A. *Self-fulfilling prophecies*. Hillsdale, N. J.: Erlbaum, 1977.
- Kirk, R. E. *Experimental design: Procedures for the behavioral sciences*. Belmont, Cal.: Brooks/Cole, 1968.
- Magnusson, D., & Endler, N. S. (Eds.), *Personality at the crossroads: Current issues in interactional psychology*. Hillsdale, N. J.: Erlbaum, 1977.
- Markus, H. & Sentsis, K. The self in social information processing. In J. Suls (Ed.), *Psychological perspectives on the self* (Vol. 1). Hillsdale, N. J.: Erlbaum, 1982.
- Shrauger, J. S., & Schoeneman, T. J. Symbolic interactionist view of self-concept: Through the looking glass darkly. *Psychological Bulletin*, 1979, 86, 549-573.
- Snyder, M., & Gangestad, S. Hypothesis-testing processes. In J. H. Harvey et al. (Eds.), *New directions in attribution research* (Vol. 3). Hillsdale, N. J.: Erlbaum, 1981.
- Swann, W. B., Jr. Self-verification: Bringing social reality into harmony with the self. In J. Suls & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self* (Vol. 2). Hillsdale, N. J.: Erlbaum, in press.

- Swann, W. B., Jr., & Hill, C. A. When our identities are mistaken: Reaffirming self-conceptions through social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1982, 43, 59-66.
- Swann, W. B., Jr., & Read, S. J. Acquiring self-knowledge: The search for feedback that fits. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1981, 41, 1119-1128. (a)
- Swann, W. B., Jr., & Read, S. J. Self-verification processes: How we sustain our self-conceptions. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1981, 17, 351-372. (b)
- Swann, W. B., Jr., Stephenson, B., & Pittman, T. S. Curiosity and control: On the determinants of the search for social knowledge. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1981, 40, 635-642.
- Wegner, D. M., & Vallacher, R. R. *Implicit psychology: An introduction to social cognition*. New York: Oxford University Press, 1977.
- Wegner, D. M., & Vallacher, R. R., (Eds.), *The self in social psychology*. New York: Oxford University Press, 1980.
- Wicklund, R. A. Objective self-awareness. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. New York: Academic Press, 1975.
- Wylie, R. *The self-concept*. Lincoln: University of Nebraska Press, 1979.

原稿受理 1983年8月19日